

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第62号

平成19年 7・8・9月



重要文化財 金銅透彫華鬘 大阪・細見美術財団

特別展

美麗 院政期の絵画

9月1日(土)～9月30日(日)
東・西新館

親と子のギャラリー

仏さまの彩り

7月14日(土)～8月19日(日)
東新館

特別陳列

古玩逍遙

服部和彦氏寄贈
仏教工芸展

6月9日(土)～7月8日(日)
西新館

文化庁購入文化財展

新たな国民のたから

新指定 平城宮の木簡

7月14日(土)～8月19日(日)
西新館

平常展

仏教美術の名品

本館 平常開館
西新館 6月9日(土)～7月8日(日)
7月14日(土)～8月19日(日)

中国古代青銅器

本館 平常開館

特別陳列

古玩逍遙

服部和彦氏寄贈仏教工芸展

6月9日(土)～7月8日(日)
西新館

服部和彦氏より寄贈を受けた、約60件のコレクションの中から、密教法具をはじめ、鏡像、懸仏、舍利容器、仏像、考古品などを展示します。服部氏が逍遙された仏教工芸の世界をたどりながら、鑑賞の楽しみを発見していただければ幸いです。



銀製層塔形舍利容器及び金製内容器 当館



瓦経 当館



金銅六器 当館

親と子のギャラリー

仏さまの彩り

7月14日(土)～8月19日(日)
東新館

今年の親と子のギャラリーは、仏像や仏画、経典などを文字通り美しく彩っている「色」に注目します。

人々は古くから、季節の移り変わりが映し出す色にこそを遊ばせ、感情を託してきました。そして自らもさまざまな素材や技法をもちいて色を表現し、生活や信仰の場を彩ってきました。

仏教美術では、仏さまという最上の存在を表現するのに、金色がもちいられました。仏さまの教えを伝える経典には、さまざまな色に染め上げた紙が使われています。寺院の内部には、緑色の釉薬をかけたタイルを使って、浄土の宝池が再現されていました。そして、堂内に安置された仏像にも、経典の説くところに従って鮮やかな色が施されていました。また、仏さまの伝記や仏教の思想を表した仏画には、仏さまの姿とともに美しい自然が濃密な彩色で描写され、もう一つの世界が創り出されています。

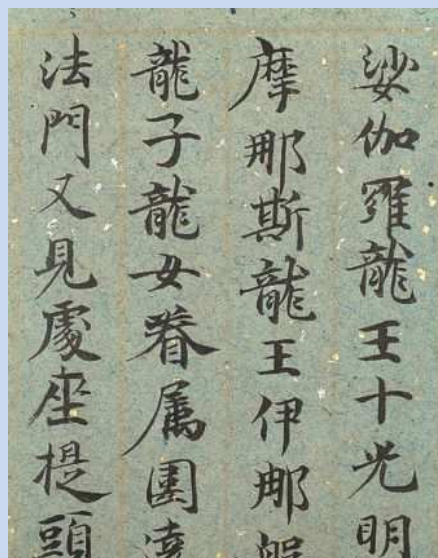
数百年を超えて今なお鮮やかな色をとどめる数々の作品をとおして、そこに込められた思いや、物語に思いを馳せてみてはいかがでしょう。昨年に引き続き、今回もハイビジョン映像を使いながら、色にまつわる表現の細部にも迫ります。作品と映像をあわせて、鮮やかな色彩の世界をお楽しみ下さい。



●刺繍釈迦說法図(部分) 当館



◎絵因果経(部分) 当館



藍紙華嚴経(部分) 当館

特別陳列

文化庁購入文化財展

新たな国民のたから

七月十四日(土)～八月十九日(日)
西新館

諸分野にわたる近年の購入品から、大和絵の駿牛図、曾我蕭白筆の屏風絵、詩絵の硯箱など多彩な品々を選んで展示します。中でも書跡は奈良時代に焦点を当てています。



菩薩半跏像

特別陳列

新指定

平城宮の木簡

七月十四日(土)～八月十九日(日)
西新館

平城宮跡の発掘調査では、数多くの木簡(文字の書かれた木札)が出土しています。近年、その一部が国の重要文化財に指定されました。「新たな国民のたから」で奈良時代の写経・古文書が展示されるのにあわせ、平城宮跡出土木簡を紹介します。木簡に記された文字や内容はもちろんのこと、使用目的にあわせて作られた多様な木簡の形態にも注目ください。

特別展

美麗 院政期の絵画

9月1日(土)～9月30日(日)
東・西新館



●不動明王二童子像〈定智筆〉 滋賀・石山寺



●後鳥羽天皇像 京都・水無瀬神宮



●孔雀明王像 東京国立博物館

平安時代後期から鎌倉時代初期、いわゆる院政期の絵画は、仏教思想を基調としつつ、院や女院の美意識とも関わり、ゆたかな展開をとげています。

白河院の時代には、大構図で美しい彩色の力強い仏画が、きわめて多数制作されたと伝えられています。一方、鳥羽院の時代には繊細優美な表現が好まれたらしく、美麗な仏画や絵巻物が遺されています。また後白河院の時代は、平安から鎌倉に移る混沌とした時代を反映しつつ、多様な絵画が制作されました。

この展覧会は、優れた仏画や絵巻物、さらには白描図像などを中心として紹介しますが、これに書跡、彫刻、工芸の名品を加えて、全体でよりゆたかな美の世界を構成し、当時の人々が創出した繊細優美な美の世界を見ようとするものです。

あわせて、仏画や絵巻物を制作した絵仏師と絵師あるいは能筆とも言うべき存在にも注目します。人々が美をどのように探求したのか、美とどのように関わったかを考え、美を創り出す工夫や、人々の意志の世界に迫ります。



●伴大納言絵巻 東京・出光美術館

鑑真・円仁・無初徳始

西山 厚（当館教育室長）

中国国家博物館の招聘で、三月十九日から四月二十七日までの四十日間、中国の各地を旅してきた。北京、寧波、蘇州、揚州、大同、鄭州……。念願だった五台山、天台山、普陀山、阿育王寺、大明寺、潭柘寺などに参詣し、一方では大きな変わり目にある現代中国のさまざまな姿を見ることができた。鑑真和尚（六八八〜七六三）、慈覚大師円仁（七九四〜八六四）、無初徳始禪師（一三五〇頃〜一四二九）。日中の仏教をつなぐ三人の高僧の足跡もたどり、本当に充実した日々だった。

揚州の大明寺は鑑真が住した寺で、伝戒の師を求めて唐へ渡った栄叡と普照がここで鑑真に出会ったのは天宝元年（七四二）十月のことだった。鑑真が日本に着いたのはその十一年後で、すでに三十六人の弟子たちがこの世を去っていた。二度目の渡海は舟山群島の沖で難破して失敗に終わり、しばらく寧波の阿育王寺に滞在するが、その舟山島にも渡り、阿育王寺の鑑真記念碑も拝することができた。

苦難の日々のなかで鑑真を支えていたのは、長屋王の詩にある「風月同天」の句だったと私は思っている。中国と日本は遠く離れていても、空をゆく風と天にかかる月は同じ……。大明寺では「鑑真学院」の建設中で、さっそく百元（千六百五十円）を寄付して石板に名前を刻んでもらった。

天台山をめざして唐に渡った円仁は、天台山へ行く許可を得られず、目的地を五台山に変更した。これが日本の仏教を大きく変えることになる。開成五年（八四〇）四月二十八日、五台山の中台の頂きを遠望した円仁は地に伏して礼拝し、涙を流した。五月



名前が刻まれるのをのぞき込む（大明寺）

月一日には竹林寺に入った。竹林寺には白玉の戒壇があり、多くの人々に食が平等に施される様子を、円仁は感動をもつて日記に書き留めている。円仁はここで五会念仏（常行三昧・不断念仏）の法を授かり、日本に念仏を伝えた。浄土宗の開祖である法然が、臨終に際して円仁の袈裟をまとっていたのはその

ためである。現在、竹林寺には円仁の記念碑が建ち、位牌も祀られている。その位牌の前で五体投地の礼拝をしたが、居合わせた中国の方々も同じように礼拝してくれたのはうれしかった。

苦勞の末、七月二日に中国に着いた円仁は日記にこんなふうには書いている。「日本国の承和五年七月二日は、即ち大唐の開成三年七月二日なり。年号は異なると雖も、而も月日は共に同じ」。これだけでも円仁がどんな人だったかがよくわかる。風月や月日を「同じ」と感じられる人だけが日本と中国をつなぐことができるのだらう。

無初徳始は今からおおよそ六百年前の日本の禪僧で、中国に五十五年間滞在し、中国で亡くなった。日本の史料にはまったく登場しないので、日本では知られていないが、南京・成都・北京など、中国の各地で研鑽し、諸寺の住持を勤めるとともに、貧しい人々の救済に尽力し、私財をいっさい持たなかった高僧である。北京郊外の潭柘寺にある無初徳始のお墓の前では、なぜか涙が流れた。

無初徳始の書は一点だけ現存している。それは「淳拙禪師塔銘」で、河南省の少林寺にある。前日に開通したばかりの新幹線「和諧号」に乗って鄭州へ。そこから車で九



無初徳始の墓の前で落涙する（潭柘寺）

十分。少林寺に着いてから四時間の探索の末に碑を見つけた時は心が震えた。思わず五体投地してしまったが、警備員がそんな私に向かって合掌し、「ナムアミトーフ（南無阿弥陀仏）」と唱えてくれたことも忘れがたい。



円仁の記念碑の脇に立つ（竹林寺）



豆 当館 (坂本コレクション)



◎伝龍猛菩薩立像 泰雲院



◎舞楽面「胡飲酒」手向山八幡宮



◎弥勒仏坐像 東大寺



◎十二神将像「波夷羅」興福寺

平常展

仏教美術の名品

本館第1～13室

彫刻

第1室

【大和の仏たち】●木造多聞天立像(法隆寺)●木造薬師如来立像(元興寺)●木造虚空蔵菩薩坐像(北僧坊)●木造十二面観音立像(松尾寺)●脱活乾漆・木造梵天立像●脱活乾漆・木造伝教脱菩薩立像以上、秋篠寺)●木造持国天立像●木造多聞天立像●木造西大門勅額(以上、東大寺)●脱活乾漆舍利弗立像●脱活乾漆目犍連立像●板彫十二神将像(以上、興福寺)●木心乾漆・伝義淵僧正坐像(岡寺)●木心乾漆阿闍如来坐像(西大寺)●木造紅玻璃阿弥陀坐像(當麻寺)●木造伝行賀坐像(興福寺)●銅造誕生釈迦仏立像・灌仏盤(東大寺)●木心乾漆・殊菩薩坐像・薬師寺●木造弥勒仏坐像(東大寺)●木造大黒天立像(興福寺)●木造大黒天立像(西大寺)

第2室

【注目の逸品】●木造如意輪観音坐像(当館)

【興福寺伝来の四天王像】●木造増長天立像(当館)●木造広目天立像(興福寺)●木造多聞天立像(当館)

【観音菩薩】●木造十一面観音立像(薬師寺)●木造千手観音立像(園城寺)●木造千手観音立像(妙法院)●木造十一面観音立像(元興寺)

【迎講の阿弥陀仏】●木造阿弥陀如来立(裸形)像(浄土寺)

第3室

【仏の荘厳】●木心乾漆・光背・木造蓮弁(以上、聖林寺)●木造蓮台(十輪寺)●銅造光背(当館)●木造光背(當麻寺)●木造仏坐

像(光背化仏)●木造飛天(以上、興福寺)●木造阿弥陀如来像(金堂西の間所用)●木造大蓋(金堂西の間所用)(以上、法隆寺)

【中国・朝鮮半島の金銅仏】●銅造二仏並坐像(当館)●銅造誕生釈迦仏立像●銅造押出五尊仏●銅造供養者坐像●銅造観音菩薩立像●銅造力士立像●銅造力士立像(以上、個人)●銅造如来立像(光明寺)●銅造如来立像(当館)

第4室

【ガンダーラの彫刻】●石造菩薩立像●石造仏伝図浮彫(以上、当館)

【中国石窟寺院の仏像】●石造如来頭部・雲岡●石造菩薩頭部(章皇)●石造菩薩頭部(響堂山)●石造螺髻髪頭部(響堂山)(以上、個人)

【中国・朝鮮半島の金銅仏】●銅造二仏並坐像(当館)●銅造誕生釈迦仏立像●銅造押出五尊仏●銅造供養者坐像●銅造観音菩薩立像●銅造力士立像●銅造力士立像(以上、個人)●銅造如来立像(光明寺)●銅造如来立像(当館)

第5・6室

【中国の仏像】●木造菩薩坐像●石造仏坐像●木造諸尊仏(以上、個人)●石造十一面観音立像●石造三尊仏(以上、当館)●石造三尊仏●石造仏五尊碑像●石造仏立像●石造浄土碑像(以上、個人)

第7室

【舞楽面】●舞楽面(胡飲酒・胡德楽・地久)(手向山八幡宮)●舞楽面(二ノ舞(腫面))(当館)

第8室

【金銅仏】●銅板法華説相図(長谷寺)●銅造薬師如来坐像(当館)●銅造菩薩立像(法起寺)●銅造観音菩薩立像(法隆寺)●銅造菩薩半跏像(東大寺)●銅造観音菩薩立像(金剛寺)●銅造誕生釈迦仏立像(悟真寺)

【特集展示 塑像と埴仏】

●塑像断片(奈良県薬師寺西塔出土)●塑像断片(奈良県定林寺出土)(当館)●塑像断片(奈良県原寺裏山出土)(明日香村)●塑像断片(滋賀県雪野寺出土)(個人)●塑像断片(鳥取県尾崎寺出土)●火頭形三尊埴仏(伝奈良県橘寺出土)(以上、当館)●方形三尊埴仏(奈良県原寺裏山出土)(明日香村)●六角形埴仏(三重県天華寺跡出土)(当館)●多宝塔埴仏(中国)(個人)

第9室

【釈迦如来】●木造釈迦如来坐像(法隆寺)●木造釈迦如来坐像(東大寺)●木造出山釈迦立像●木造釈迦如来立像(清涼寺式)(以上、当館)●木造仏涅槃像(照源寺)

【阿弥陀如来】●木造阿弥陀如来坐像(当館)●木造阿弥陀三尊像(峰定寺)●木造阿弥陀如来立像(東大寺)●木造阿弥陀如来坐像(西大寺)●銅造阿弥陀如来立像(善光寺式)(善光寺)

第10室

【地藏菩薩】●木造地藏菩薩立像(十市町自治会)●木造地藏菩薩立像(大福寺)●木造地藏菩薩立像(新薬師寺)●木造地藏菩薩立像(長命寺)

第11室

【大日如来】●木造大日如来坐像(元興寺町)●木造大日如来坐像(西城戸町)●木造伝龍猛菩薩立像(泰雲院)●木造僧形坐像(南明寺)

【神像】●木造男女神像(当館)●木造男神坐像(観音寺)

【聖徳太子像】●木造聖徳太子立像(成福寺)●木造南無仏太子像(法起寺)

第12室

【動物彫刻】●木造狛犬●木造獅子頭(以上、手向山八幡宮)●木造狛犬●木造獅子(以上、当館)

第13室

【明王像】●木造五大明王像(当館)●銅造不動明王立像(当館)●木造不動明王坐像(正寿院)●木造不動明王立像(個人)●木造不動明王坐像(園城寺)

【天部像】●木造十二神将立像(辰・未)(室生寺)●木造毘沙門天立像●木造伝大黒天立像(以上、当館)●木造増長天立像(法明寺)



【注目の逸品】 如意輪観音坐像

当館
木造・古色
像高九四・九cm
平安時代(九～十世紀)
重要文化財

京都市上京区の回向院伝来とされ、寺伝では丹後地方の海中から発見されたという。
頭・体の幹部を概の一材から造り、内列をほどこさない。この構造と、おおりの筒型宝冠を同木から形成すること、眉の連なつた厳めしい表情、奥行きのある頭部、幅広いゆつたりとした体軀などから、平安時代も前期の制作と考えられる。左肩からかかる帔は腹前を幅広くおおい、背面でも大きく広がって台座に接しようとしている。類似する表現は天台系の作例に見いだせることから、本像も天台系の図像によつたかという推測がある。

(岩田茂樹)



紺紙金銀交書弘明集卷第十七
《中尊寺経》 当館



●十二天像《日天》 西大寺



◎銅錫杖頭 個人



経筒
《長門一ノ宮経塚出土》
当館



隅木蓋瓦《上野廃寺出土》
当館

平常展

仏教美術の名品

《考古・工芸・絵画・書跡》

西新館

7月14日(土)～8月19日(日)

考古

深鉢形土器(伝茨城県出土)、土偶(山形県杉沢遺跡出土)、注口土器(伝青森・岩手県出土)、銅矛(長崎県黒島出土)(以上、当館)、銅鐸(妙国寺)(妙国寺)、弥生土器(大阪府東瓜破大和川床出土)(個人)、銅鏡(奈良県佐味田宝塚出土)、埴輪犬(伝茨城県出土)、鉄地銀荘鞍金具・鉄製轡・鉄製鍔先ほか(奈良県・塚古墳出土)(以上、当館)、●粟原寺伏鉢(談山神社)、素弁蓮華文軒丸瓦(奈良県横井廃寺出土)、単弁蓮華文軒丸瓦(奈良県山田寺跡出土)、複弁蓮華文軒丸瓦(奈良県川原寺出土)、単弁蓮華文軒丸瓦・均正唐草文軒平瓦(奈良県山田村廃寺出土)、複弁蓮華文軒丸瓦・均正唐草文軒平瓦(奈良県東大寺出土)、隅木蓋瓦・風鐸(和歌山県上野廃寺出土)(以上、当館)、鬼身文鬼瓦(伝奈良県薬師寺出土)(京都国立博物館)、◎山代忌寸真作墓誌(奈良県五條市出土)、行基舍利瓶残欠(奈良県生駒市出土)(以上、当館)、須恵器短頸壺・和同銭(奈良県甘樫丘出土)(個人)、平瓶骨蔵器(奈良県壺阪寺奥院出土)、灰釉短頸壺・同皿(茨城県八郷町出土)、◎青磁牡丹唐草文深鉢・瓦製火鉢(奈良県正暦寺出土)(正暦寺)、飛鳥文陶製外筒(愛媛県松山市出土)、銅製経筒ほか(山口県長門一ノ宮経塚出土)、銅板経(大分県長安寺経塚出土)、瓦経(福岡県飯盛山経塚出土)、蓮弁文壺(和歌山県熊野新宮経塚群出土)、二筋壺(出土地不詳)(以上、当館)

工芸

◎金銅種子華鬘(当館)、◎金銅透彫尾長

鳥文華鬘(細見美術館)、金銅透彫尾長鳥文華鬘(当館)、◎金銅透彫蓮華文華鬘(神照寺)、黒漆礼盤、黒漆須弥壇、黒漆螺鈿散蓮華螺文卓(以上、当館)、金銅装説相箱(個人)、◎金銅装黒漆塗輪宝羯磨宝相華文戒体箱(金剛寺)、◎黒漆時絵輪宝羯磨獅子文戒体箱(万徳寺)

信具

銅錫杖頭(当館)、◎銅錫杖頭(個人)、銅錫杖頭(施福寺)、銅手錫杖(当館)、木製持蓮華(西光寺)、菩提子念珠、水晶念珠、金銅装笈(以上、当館)、金銅装笈(松尾寺)、◎銅鉢、◎鉦鼓(以上、東大寺)、塔鏡形合子、銅柄香炉(以上、当館)、金銅柄香炉(高山寺)、響銅王子形水瓶(承盤つき)、銅王子形水瓶、銅仙蓋形水瓶、銅水瓶、銅信貴形水瓶(以上、当館)、銅獅子牡丹文信貴形水瓶(個人)、銅布薩形水瓶、銅布薩水瓶(魚形注口)(以上、当館)、銅布薩形水瓶(魚形注口)、銅布薩水瓶(以上、個人)

絵画

◎十王像(陸信忠筆)(当館)、◎当麻曼荼羅(西教寺)、智光曼荼羅(文化庁)、◎九品来迎図(上品上生)(龍土寺)、阿弥陀如来像(極楽寺)、◎一遍聖絵(第五卷)・清浄光寺、覚禪鈔(降三世明王法)、両界曼荼羅、如意輪観音像◎文殊菩薩像(文観供養館)、◎不動明王八大童子像(以上、当館)、◎愛染明王像(宝山寺)、両頭愛染曼荼羅(当館)、◎十二天像(毘沙門天・日天)(西大寺)

書跡

◎紫紙金字光明勝王経、大智度論卷第六十六(既多寺知識経)、◎中阿含経卷第九《善光寺印経》、法華経卷第一《蝶島下絵料紙》、法華経卷第二《蝶島下絵料紙》、紺紙金銀交書弘明集卷第十七《中尊寺経》、講式、◎地蔵講式(以上、当館)、◎弥勒講式、◎地蔵講式(以上、笠置寺)、悉曇藏、明恵上人夢記◎東大寺開田図(以上、当館)

平常展

中国古代青銅器(坂本コレクション)

本館第14・15室

爵・尊・鼎など中国古代の商(殷)～漢代に製作された青銅器の逸品を展示しています。

パネル展示

修復文化財

地下回廊

絵画

重要文化財 絹本着色四十九化仏阿弥陀来迎図(京都 光明寺)

彫刻

重要文化財 木造持国天立像「内山水久寺伝来」(奈良 東大寺)

工芸

国宝 毛抜形太刀「若宮御料古神宝のうち」(奈良・春日大社)

パネル展示

国宝 十一面観音像(当館蔵)の光学的調査

地下回廊

●「国宝」

◎「重要文化財」

以上すべての展示において、出陳作品を一部変更する場合があります。

【表紙写真解説】

金銅透彫華鬘(大阪・細見美術財団)

鎌倉時代(十三世紀)重要文化財

華鬘は古代インドの花輪に起源をもつ飾りで、仏殿の長押などに懸けられる。これは銅板に宝相華文様を透彫し、中央の紐や鳥の胴部に別に作った打出金具を鋲でとめた金銅製の華鬘。鳥の羽や胴部、宝相華文様には繊細な毛彫が施されている。鎌倉時代の作と推定されるが、優美な文様表現に平安時代の余香が感じられる名品である。(内藤榮)

●奈良国立博物館賛助会員

2007年6月1日現在、個人会員22名、団体会員11団体、特別賛助会員6団体の登録を頂いております。
新規会員となられた方のご芳名をあげさせていただきます。

【特別会員】 ノブレスグループ 様

【団体会員】 三機工業(株) 様

【個人会員】 原田 清朗 様 桃尾 英宣 様

* 賛助会員に関するお問い合わせは、
奈良国立博物館 渉外課 営業開発担当まで。

◆キャンパスメンバーズ

奈良国立博物館は、大学等と連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する「キャンパスメンバーズ」の制度を設けております。

会員大学等の学生および引率教職員は平常展については無料、特別展については団体料金で観覧できます。(学生証および引率教職員は身分証明書の提示をお願いいたします。)

2007年6月末日現在19大学が入会されております。

新規入会された大学は次のとおりです。

佛教大学 奈良大学 京都工芸繊維大学 同志社大学 文化情報学部 種智院大学
大阪成蹊大学 芸術学部 大阪大谷大学・大阪大谷大学短期大学部 (順不同)

* キャンパスメンバーズに関するお問い合わせは、
奈良国立博物館 渉外課 営業開発担当まで。

展示評

特別展『神仏習合』に寄せて

長岡 龍作

(東北大学大学院文学研究科教授)

奈良国立博物館が開催する「神仏習合」展——こう聞いただけですでにわくわくするような心持ちになった。期待を胸に博物館を訪れたのは四月も末に近い頃。展覧会は、この重要かつ困難なテーマに対して、十の切り口から具体的に迫ろうという意欲に満ちたものだった。

導入は第一章「神と仏の出会い」。日本在地の神の世界に仏教が移入され、このふたつの世界観が拮抗し融合してゆく。展示されていたのは、そのような初期の信仰の跡を伝える品々だ。その中では須弥山石が圧倒的な存在感を示していた。神と仏という呼び方の違いはあるが、このいずれもが超越者であることにはかわりはない。神仏習合の美術や遺物は、そのような超越的な存在と触れ合うために人々が造ったものといっている。須弥山石はまさにその代表だ。須弥山は、山頂には帝釈天、中腹には四天王の宮殿のある天たちの住み処。往時の人々が、仏教的世界の中心に聳える想像上の聖山を現実にとり上げたのは、その山の前で誓いを立てる必要があったからだ。

今回の展覧会の重要な切り口のひとは、仏教的「天」と日本的「神」を同じ位相に位置づけたことである。この二者が同じというのは、その役割が共通するということ。古代日本の仏教において、「天」は誓いやおこないの監視者という役割を果たした。日本の「神」もまた誓約の場に勧請されそれを監視するのだ。日本的「神」に仏教的役割が備わることには像の成立を促した。第二章「神像の出現」はその様相を浮き彫りにする。以下、展覧会は、八つの個別テーマに沿って「神仏習合」という現象に迫っていく。

この展覧会が示すように、「神仏習合」は多くの側面にわたる現象だが、あえてそれを要約すれば、人が何らかの場所で超越者と触れ合うという側面に尽きる。さまざまな造形物はその接面に生まれるのだ。これは、宗教美術・殷の本来のありように等しい。そこから一歩進んで、これを日本固有の問題とすると、日本の神と外来の仏というふたつの超越者に日本人がどのように向き合ったのかという問いが生じる。この二者を

整合的に説明するロジックが本地垂迹という思想だ。

このように、聖性の「習合」というのは、それを意味づける人間の側の問題である。したがって、この現象を整理しようとするならば、人の行為を軸に据える必要がある。この展覧会の各章は、そのことに十分意を払っているとは思えるのだが、全体を通したテーマが見えにくい印象を受けたのは、各章相互の関係が伝わりにくかったからかも知れない。各章は、大きく、像、場所、人、思想、儀礼の問題に分けられる。像は、すでに述べた第一、第二章、場所は、第三章の「山」と第七章の「社」、人は、第四章の「御霊」「すなわち「神になった人」と第五章の「神に詣でる僧侶」、思想は、第六章の「本地垂迹」と第八章の「伊勢信仰の密教化」、儀礼は、第四章の「神前読経」と第十章の「能」である。人はどこでどのように神仏と接触したのかという観点から各章相互の関係をもう少し説明すればなおよかったという感想を持った。

とはいえ、出品作の質の高さと豊富さには目を見張った。第一章の福井多田寺の葉師像は厨子の中で見るのとはまったく違う存在感を示していた。第二章では神像の多様なありようを見せようとする意図がよく伝わった。なかで、広島御調八幡宮の神像はこの機会を逃してはまず見られない尊像だろう。また、第六章「本地垂迹」・第七章「宮曼荼羅」の充実ぶりも見事だった。近年、本地垂迹思想に関する研究は飛躍的に進展しているが、それを参照すればそのような思想が美術に込められていることはもはや疑いない。思想が美術にどのような視覚化されているのかを問うことは今後ますます必要になるだろうが、今回の展覧会は、鏡像や宮曼荼羅を多数展示することを通して、その問題への重要な提言をなした。

最後になるが、この展覧会も主張しているとおり、神仏習合は特に景観と深く関わるべきことである。神は風景の中に降臨するからだ。そうであれば、展示にもっと神の居場所を示す工夫があってもよかったように思う。写真、ネルはあったのだがそれが少々小さかったことや地図が少なかったことが残念だった。

●公開講座●

- 6月30日(土)「密教法具入門」内藤 栄 (当館工芸考古室長)
- 8月4日(土)「座談 文化財修理40年 ―絵画・書跡―」
田畔 徳一 (前 株式会社文化財保存代表取締役)
(司会進行) 鈴木 喜博 (当館上席研究員)
- 9月1日(土)「院政期、その美意識」
濱田 隆 (元奈良国立博物館館長)
- 9月15日(土)「院政期の絵画 ―色とかたち―」
梶谷 亮治 (当館学芸課長)
- 9月29日(土)「院政期の料紙装飾と文字の荘厳」
松原 茂 (東京国立博物館上席研究員)

※各回とも午後1時30分～3時(開場は午後1時)、当館講堂にて。聴講無料。
定員200名。午後1時より講堂入口で整理券を配布します。

●サンデー・トーク●

- 7月15日(日)「近づいてみる色とりどりの世界」
宮崎幹子(当館研究員)
- 8月19日(日)「モンゴルの月を仰いで―異文化交流の体験―」
吉澤 悟(当館資料室長)
- 9月16日(日)「院政期の絵画・入門編」
北澤葉月(当館研究員)

※各回とも午後2時～3時30分(開場は午後1時30分)、当館講堂にて。
聴講無料。

●第36回 夏季講座「院政期の絵画」●

主催 奈良国立博物館／奈良女子大学21世紀COEプログラム

- 9月19日(水) 10:20～17:00
①特別講演「院政期の絵画」 梶谷亮治(当館学芸課長)
②特別展「美麗 院政期の絵画」見学
- 9月20日(木) 9:20～16:30
①院政期 その時代と特質 元木泰雄(京都大学教授)
②院政期の仏教 平 雅行(大阪大学教授)
③院政期の文学 ―往生の表現― 千本英史(奈良女子大学教授)
④院政期の美術 ―過差と奇巧― 佐野みどり(学習院大学教授)
- 9月21日(金) 9:20～16:30
①信西一門という真俗ネットワークと院政期絵画制作
マイケル・ジャメンツ(京都大学非常勤講師)
②院政期仏画における賦彩と文様表現について
有賀祥隆(東北大学名誉教授)
- ③「伴大納言絵巻」を味わう 黒田泰三(出光美術館学芸課長)
④「応徳涅槃図」の醍醐味 泉 武夫(東北大学教授)

会場 奈良女子大学講堂(近鉄奈良駅から徒歩約5分)
※19日午後は、奈良国立博物館

会費 3,000円
※テキスト代などを含みます。受け付け決定後に振り込んでいただきます。

定員 400名
※応募多数の場合は奈良国立博物館友の会メンバーを優先し、なお多数の場合には抽選で決定します。

応募方法:《往復はがき》による、郵送に限ります。
※「夏季講座参加希望」と書き、
〔氏名・住所・郵便番号・電話番号・性別・年齢〕を明記して下さい。
奈良国立博物館友の会のメンバーの方は、友の会カード番号もお書きください。
※返信用はがきには宛名を記入してください。
受け付けの可否を8月24日(金)までにご連絡します。
※はがき1枚につき申込者1名としてください。
※(申し込み先)〒630-8213 奈良市登大路町50 奈良国立博物館教育室

応募締め切り: 8月13日(月)必着。
問い合わせ先: 教育室 電話0742-22-4464 FAX 0742-22-7221

あ み だ に よ ら い ぞ う 阿弥陀如来像

奈良・極楽寺
絹本着色 縦190.0cm 横104.8cm
南宋時代

玉飾りが廻らされた豪華な荷葉型の天蓋がかかる大きな蓮台上に、台座に比して小さな阿弥陀如来が坐っている。描かれる尊格はこの台座に沈静な面持ちで坐す阿弥陀のみ。台座が置かれるのは装飾的なタイルが敷き詰められたどこともいえない不可思議な場所である。

この阿弥陀如来像は有名ではないが、縦の寸法が2m程もある巨幅で、同じような図様をもつ作品は他にひとつもみつからない、稀有な作品である。細いラインを幾重も引き重ねて、阿弥陀のまとう朱い衣の波打ちを表す表現や、横長で張りのあるお顔と四角い額などは、京都・清浄華院の阿弥陀三尊像（南宋時代）などに近く、また蓮台や天蓋に細かく施された雲気文のような装飾文様やタイル中央の宝珠の形状は、当館所蔵の仏涅槃図（南宋時代）中のモチーフに共通するなど、表現のひとつひとつには、それぞれに南宋期の仏教絵画との共通が認められる。そのため、制作の場所や背景はわからないものの、本図は暫定的に南宋時代の制作と考えられている。

特徴はその豪華な天蓋と台座にあるが、台座からは四本の宝幢が立ち上がっている。このように台座に四本の宝幢が立つことは、阿弥陀の経典のなかでも『観無量寿経』にしか記されていないことが知られている。もし本図が『観無量寿経』を典拠にしているとすれば、この作品は『観無量寿経』に記される阿弥陀のある極楽浄土を観想する十六の段階のうちのひとつ、阿弥陀の台座を観想する「華座観」に拠るものと想像される。宋代には十六観による観想が宗派を問わず盛行した。本図もそのような状況下で制作された可能性はあるだろう。

北澤 菜月（当館研究員）
西新館 7月14日（土）～8月19日（日）

平常展の みどころ

とうだい じ かいでん ず 東大寺開田図 えつ ちゅうのくに い みず ぐん なる と むら こん でん ず 越中国射水郡鳴戸村墾田図

奈良国立博物館
紙本墨画淡彩 縦62.6cm 横57.7cm
奈良時代（8世紀）
重要文化財

東大寺開田図は、文字通り東大寺が開墾した田地の図で、越中国は現在の富山県、射水郡鳴戸村は高岡市の中心部あたりかと推定されている。

図には、全面に墨線で碁盤目状のマス目が引かれ、画面中央から右寄りの一帯のマス目には文字が書き込まれている。その一方で、左半分には全く文字のない領域が広がっている。碁盤目状の方格線は、古代の土地区画制度である条里を表したものである。

マス目の文字の間を縫うように朱線が何本か引かれているが、よく見ると朱線にはマス目の方格線と平行に引かれる線（明るい朱色）と、方格線を無視して斜めに引かれる線（茶色がかった色）の2種類がある。茶色の線は、現地を流れる川（水路）を描いたものだが、問題はもう一方の明るい朱線で、これは開田図の作成目的に関わる線である。

本図は、東大寺が開墾した田地の範囲を確定するために作成された。朱線は、東大寺の田地と、それ以外の土地との境界を示したものである。このため朱線より内側の東大寺の土地には詳細な書き込みがなされたが、朱線の外側は東大寺と関係がないためマス目には何も書き込む必要がなく、画面の左半に大きな空白地帯が出来たのである。

奈良時代、東大寺は北陸地方を中心として各地に荘園を設け、そこからの収入によって寺院運営経費の一部をまかなった。こうした荘園では、それと接する土地の所有者との間で、境界線をめぐって係争になることも多かったため、土地の範囲を確定する図を作成する必要があったのである。



野尻 忠（当館研究員）
西新館 7月14日（土）～8月19日（日）

開館予定（7月～9月）

■開館時間

午前9時30分～午後5時（毎週金曜日と8月11日（土）～15日（水）は午後7時まで）
※いずれも入館は閉館の30分前まで

■休館日

月曜日（祝日等の場合はその翌日）
※8月13日は開館します。

■新しい割引サービスのお知らせ

毎月22日は「夫婦の日」として、ご夫婦で入館される方の観覧料金を一般の半額と致します。

観覧料金

特別展「美麗 院政期の絵画」

	一般	高校・大学生	中学生以下
当日	1,000円	700円	無料
前売	900円	600円	
団体	900円	600円	

平常展・特別陳列・親と子のギャラリー

	一般	高校・大学生	中学生以下
個人	500円	250円	無料
団体	400円	200円	

団体は責任者が引率する20名以上



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので最寄りの県営駐車場等（有料）をご利用下さい。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒（90円切手貼付、宛名明記）を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。